

# “Heart to Heart”

第3巻 第2号

発行日 平成20年12月8日

心から心へ わかちあう あたたかさ

## 励みとなるお手伝いを

武蔵野東教育センター所長 長内博雄

### 目次:

励みとなるお手伝いを 1

コラム：  
社会人として自立した我が子ー  
会社でも家庭でも大きな存在となって 2

療育プログラムのようす 2・3

コラム：ASA会議に出席して 4

教育センターからのご案内 4

今年も早や師走を迎えています。

子どもたちは、この秋には幼稚園や学校でたくさんの行事を経験したと思います。それぞれの子どもにとって、とても楽しかったものもあれば、本人にとってやっていることの意味があまりわからなかったり、ストレスが感じられたりしたものなどいろいろだったかもしれません。大勢で行う行事にはさまざまな要素が含まれています。全てのことが各個人のニーズにジャストタイミングで合っているとは限りませんが、子どもにとってはやはりインパクトの強い経験であり、雰囲気慣れるということなど目に見えない部分を含めて、確かな成長の糧になっているものと思います。

教育センターでは、全体で行う大きな行事というものはありませんが、できるだけ各プログラムの中に動きをもたせ、子どもたちがさまざまな活動に慣れていくようにしています。たとえば作業や学習の合い間に運動を入れたり、各グループが集まってゲームをしたり、また屋上での遊びやピオトプの観察に行ったりして活動に変化をつけています。その他に、子どもたちがスタッフルームを訪ねて先生方に製作した作品を説明したり、ハロウィンの時期には、製作したお面をつけて「トリック・オア・トリート！」の遊びを楽しんでおやつをもらったりしながら、ことばの使い方を練習する場面を作っています。いろいろな場面における対応の仕方を数多く経験することは、社会性を養い、行動力に幅をつけます。

さて、にぎやかさやあわただしさの漂う年末の独特の雰囲気は子どもにも伝わっていて、楽しさを予感させているようです。中には、巷のにぎわしさに影響されるのかクリスマス

スのきらびやかな飾り付けやイルミネーションに心躍るのか、たまに一人でどこかをうろついてしまう子どももいますので、お子さんによっては注意が必要です。

冬休みに入ると、家で過ごす時間が圧倒的に多くなるわけですが、自由な時間の過ごし方が不得意なこの子どもたちにとって、暇があまりすぎるとよくないパターンを生み出しがちです。その生活パターンがこだわりのように固定化すると、それを崩して生活に幅を持たせるようにすることは簡単ではありません。そこで、積極的によい習慣を生活にもちこむことが、子どもの創造的な生活を可能にしていく鍵になります。

家庭でお手伝いを始めることは、新たなことができるようになったという達成感を生むとともに、家族の一員として役割を果たしているという自尊感情を育みます。また、学校や教育センターで学習したことを、見覚えのあるプリントをもとに家庭学習したり、センターで手がけた作品を家でも作ってみたりしながら、メリハリのある過ごし方を心がけたいものです。その際にはあまりに期待を高く持ちすぎることなく、あくまでも本人のレベルの一步だけ先を見るようにして、成し遂げたときにはぜひ心からほめてあげてください。

日本の伝統的な文化のおうこの年末年始は、お子さんの教育にとってもよい機会です。年の暮れやお正月の雰囲気を活かして楽しさを存分に与え、お子さんの心を揺り動かしていただきたいと思います。楽しさはがんばる気持ちにつながります。

どうぞご家族でよいお年をお迎えください。





## コラム 自閉症児の子育てから(4)

### 社会人として自立した我が子 - 会社でも家庭でも大きな存在となって

在学中に何回かの実習を経験してから、就職先として推薦されたのは手芸のデザインや教習、キットの卸をしている小さな会社でした。数名の女性で構成された有限会社です。当時の親の気持ちとしては、途中で転職は難しいだろうと思いましたが、しっかりと基盤のある所が良いと考えていました。

それでもこの会社に決めた理由は2つありました。就職しても成長できる環境と指導者である社長の人間性です。19歳の娘が更に成長する環境とは、出来そうな仕事をどしどしやらせて下さる上司と、何事も他の社員と同等に遇して下さる社長との人間関係でした。過度な保護やお客様待遇とは無縁の職場で、もっと早く、言われたとおり、きちんと最後まで、それは途中で止めてこっちを先に等々の指示をひっきりなしに出されながら、娘は与えられた仕事に全力で取り組まざるを得な

かったようです。数人の上司の助手として多様な仕事を与えられるので緊張感や気配りの必要もあります。

手先の器用さを生かして誰にも負けない仕事の分野を獲得できた頃には、仕事に対する自信と責任感と誇りが育っていました。土曜日にディズニーランドに行く計画をたてていても、金曜日に帰宅してから「会社が忙しいから明日は出勤します」と自分で判断して親をギャフンと言わせたこともあります。

勤続15年を経た今、この娘がいるからみんな頑張って会社を継続していると社長はおっしゃいます。この会社で働くことが娘の生きがいになっています。

親である私たちが既に老齢に達してきました。周りを見ると友人の多くは夫婦二人だけの生活を送っています。ところが我が家にはこの娘がいてくれます。私たちの生活振りや楽しみ方に娘

岩崎 敦子(保護者、学園アドバイザーボード)

が若い息吹きを吹き込んでくれるのです。12月に入って我が家のペラングにはクリスマスのイルミネーションが輝き、はしごを登るサンタが飾られています。10月はハロウィーンのコレクションでした。すべて娘の作品です。心が明るく豊かになります。

休日には洗濯物を干したりたたんだり、アイロン掛けを一手に引き受けてくれる娘を見ていると、将来は私たちの方が娘に支えられる日がくると感じています。

さらに34歳になっても心の清純さはそのまま、周囲の人々の心まで洗われていく様子を見るにつけ、本人の社会自立に留まらない影響力の大きさに驚かされます。一緒に暮らしている私たち親にとってばかりでなく、この娘の存在は社会の宝であるさえ思われてきた最近の娘の様子です。



次回は大南英明先生(学園アドバイザーボード)のコラムをお届けします。

## ASA会議に出席して

7月6日から7月13日の日程で、高松、大久保が、BHS(ボストン東スクール)を訪問し、フロリダ州オーランドで開催されたASAコンファレンス(Autism Society of America)、全米自閉症年次大会に出席してきました。

7月7・8日は、BHSの見学と教育に関するミーティングを行いました。まず、BHSのPT(理学療法士)と体育活動についての意見交換を通して、発達障害の子どもにとっての運動や体育指導の重要性と方向性を再確認しました。次に、Literacy(読み書き)の指導について専任担当者と話しました。英語と日本語という大きな違いはありますが、共通する課題も多く、有意義な情報交換ができました。最終日には、歓迎のバーベキューを楽しみながら、多くのスタッフや保護者と歓談し親交を深めることができました。



ボストン東スクール



授業の様子

9日からは、フロリダ州オーランドへ飛び、ASAコンファレンスに出席。10日には、高松がBHSのスタッフ等と共に“The Three P's of Behavior Support Plans: Prediction, Proaction, Prevention”「行動サポートプランのための3つのP: 予測、事前の対処、予防」というタイトルで発表しました。ASAのこの年次大会は毎年大きなホテルを借り切って開催されていますが、発表希望が全米から殺到し、発表を申し込んでも選出されないことが多い中での快挙でした。発表を締めくくると、BHSの生徒の活動のビデオが終了すると、会場は大きな拍手に包まれました。また、BHSの情報展示ブースには、連日多くの人々が足を止めスタッフに熱心に質問する姿が見られました。忙しくも収穫の多い一週間を終え、両名帰国の途につきました。



ASAでの発表



BHS展示ブース